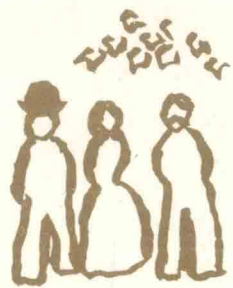
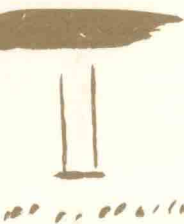


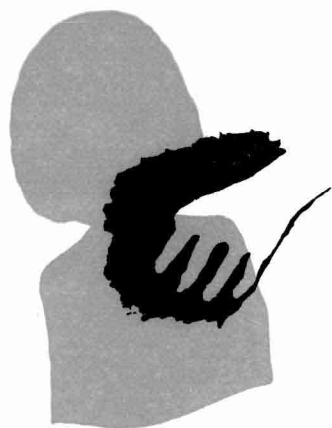
優しさで

今江祥智、作

長新太、絵



理論社



今江祥智、作

長新太、絵

優しさびしい

優しさのつこ

1977・初版

作者 今江祥智 ©

画家 長 新太



制作 小宮山量平

発行 山村光司

株式会社 理論社

東京都新宿区若松町一〇四

電話 〇三(203)五七九一

振替 東京九一九五七三六

ZDC 913 A 5 4 2 20cm 316 P 8393-31701-8924

発行日 一九七九年三月第七刷

冬子に

△世間には、両親が別れたために不幸な子どもが
たくさんいる。しかし、両親が別れないために
不幸な子どもも、同じだけいるのだ△▽

——エーリヒ・ケストナー

もくじ

第1章	夏の日ざしがあんまりまぶしいので、あかりは清おじさんのサングラスを借りて、かけてみた……	5
第2章	とうさんが「講演」しているあいだ、あかりはその部屋のいちばんうしろの席に坐って……	15
第3章	夏休みだったことが、ほんとに幸いだった……	25
第4章	とうさんのモウクンレンと、あかりのガマンにもかかわらず……	35
第5章	とうさんは、一覽表といっしょに自分の結婚後十三年間の思い出も……	45
第6章	おれはおれなりに一生懸命やってきたし、その学校が好きだから……	55
第7章	にしんぞうめん、小なすの茶せん揚げ、アユのおどり焼きにスズキのあらい、じゅん菜の……	65
第8章	宇多野さんの電話を切ってから、とうさんはふっと考えた……	75
第9章	お椀があるのにふたがない、トンカチは見つかったが、ねじまわしはどこかへ消えた……	85
第10章	去年のセエタアを着せると、あかりはかかしに古着を着せたようになかった……	95
第11章	藤田さんは、早速にとうさんの願いを叶えてくれた……	105
第12章	おれにとってもこれまでに、ちゃんと何人かの「相棒」がいたなあ……	115
第13章	電車の音がとうさんの声を消してしまったのか、あかりは答えなかった……	125
第14章	「私はこのあいだ、父といっしょに、高知へいってきました……	135
第15章	冬休みにはいったあかりの相手は、結局とうさんしかいなかった……	145

第16章	正月の訪客に疲れてしまった感じで、とうさんは、一人になりたくて植物園へでかけた……………	155
第17章	正月早々で、しかも今おたくがシンドイのン分かつてるけど、泊めてもらえん？……………	165
第18章	あかりは、一週間、とうさんなしで暮した……………	175
第19章	とうさんのひげは、とうさん自身が思っていたよりも、はるかに濃かった……………	186
第20章	六甲から帰ってから、とうさんはときどきひとりとをいうようになった……………	196
第21章	春休みは、とうさんの方があかりよりひと足早かった……………	206
第22章	ふたりの若い食欲にそそのかされて、とうさんもきれいに平らげていった……………	217
第23章	七人の侍ならぬ大人五人子ども二人の一同は、無事に大山のモンキー・センターに到着した……………	228
第24章	島田さんがもってきた絵本の原稿は、とうさんを正直うならせた……………	238
第25章	あかりは敏感に察していた……………	248
第26章	それから何日も、とうさんはあかりとのやりとりを、頭のすみっこに思いうかべていた……………	259
第27章	―ほんまやろか、そんなン……………	269
第28章	……とうさんは見しらぬ街の通りを駈けていた……………	279
第29章	とうさんの絵葉書にたいして、山名さんは返事をくれなかった……………	290
第30章	あかりはとうさんの決心がうれしかった……………	300
あとがき	……………	311

そうてい・さしえ 長 新 太



第 1 章

1

夏の日ざしがあんまりまぶしいので、あかりは清おじさんのサングラスを借りて、かけてみた。明るすぎて、白っぽく散りちりに見えていたブラットホームからの街の風景が、水族館の水槽すいそうの中のように、ほの暗くサングラスの中におちついた。

街が急に夕ぐれゆぐれの光につつまれたみたいで、ほんとに時間もすぎってしまったみたいで、あかりはうっかり、きょう一日中、ここでこうして、とうさんとかあさんの帰りを待っていたような気もちになった……。

そう思えたのもわりはない。かあさんがかけてからもう十日、とうさんがかけてからでも四日間すぎていたのだ。

かあさんは、ここ（宇治の町）が暑すぎるから黒姫の友だちの山荘へでかけるといっていたし、とうさんは、そこでかあさんがたおれたからだといってでかけた。小学校三年生のあかりには、黒姫まで四時間もかけてでかけるよりも、家でのおんびり遊んでいたほうがよかったし、だいいち、たまに、かあさんの——なさい、——してはいけません……という、命令と禁止ことばヌキで日をすごしたかった。それで、とうさんとるすばん役を買ってでたのだったが、とうさんまででかけるとは思わなかった。ひとりぼっちになったあかりのために、ピンチヒッターとして、清おじさんの夫婦がやってきてくれた。清おじさんは、かあさんの弟だ。京都大学に受かったのに、合格できると分かればいいんだ——と、あっさり大学行きはよして、おやじさんの仕事のあとつぎに打込んだ。おかげでいまは、神戸の山の手で、小綺麗な洋服屋コブレイファッションさんの店をもって暮している。子どもがいらないから、こんなときはいつも気さくにやってきてくれて、あかりもなついていた。

とうさんがでかけたあとの四日間、おじさん夫婦は、あかりを相手に、ほんとによく遊んでくれた。近くのホテルのプールで一日泳いだ。京都まででかけて、繁華街の遊戯場^{ゲームセンター}で半日遊んだ。六本立てのお子さま映画大会にもつきあって、夫婦ともアイスクリンをなめてくれた……。

あかりのとうさんは画家で、よくスケッチ旅行にでかけたり、展覧会の前は画室にとじこもったり、おまけにこのごろは、子どもの絵本を描くことがおもしろくなって熱中したり……で、あかりと遊んでくれる時間があまりなかった。

もっとも、ひまがあれば、あかりを近所の川へつれて行って、半日くらい、自分のほうが熱心にオタマジャクシすくいをすることはあった。とってきたオタマジャクシを庭のすみっこの池に放したら、それがみんなちゃんと育ったから、かあさんが悲鳴^{ひやう}をあげた。きらいなカエルが池から庭にあふれるくらい動きまわり、鳴きたてたからだ。二人のオタマジャクシすくいは以後、禁止された……。

あかりが一年生になった春、お祝いに、油絵のりっぱなセットを買いこんできて（十号のキャンバスと、それにあわせた額^{がく}ぶちまで揃^{そろ}っていた）、かあさんをあきさせた。クレヨンもまだろくにあつかえないのに、油絵道具一式だなんて、そんなものより、いまあかりが喜ぶようなものか思いつけなかったの……と、とうさんは叱^{なぐ}られた。あかりは、とうさんのとんちんかんなプレゼントがうれしかったのだったが、そんなふたりを見て、黙^{もく}ってしまった。油絵セットは、いまでも、あかりの部屋の押入の奥に、きちんとしまいこまれたままだ……。

*

そして五日目の朝、きのうのとうさんからの連絡^{れんらく}で、ふたりの帰宅を知らされて、あかりは清おじさんと駅にきていた——というわけだった。名古屋から新幹線で京都につくからというので、暑いところをがんばって、京都駅まででむかえることにした。（いつもなら、近くの近鉄の大久保駅までし

かいかない。)

あかりは、ずりおちそうになる大きなサングラスを指でおしあげた。そこへ、目の前の街の風景を横切って列車がすべりこんできた。サングラス越しに見るひかり号は、水族館の大水槽に泳ぐフカミたいだった。

停止。扉が開く。人の少ない京都駅ではプラットホームのはしまで見通せる。あかりは、背のびしてふたりの姿をさがした。まばらにおりてくる乗客の中で、のっぼのとうさんのポロシャツ姿が、まづ見つかった。あかりが手をあげ、とうさんがこたえた。かけていきながら、あかりはかあさんの姿をさがしたが、見つからないうちに、横の列車の扉がしまった。はっと立止ったあかりの気もちを先取りしたようにとうさんが言った。

―おりたのはとうさんだけや。かあさんはこのまま大阪までのっていく言うとするさかい。

―大阪って、どこへ？

―螢ヶ池のサトや。

―なんで？

―疲れとるさかい、もうちょっと休みたいんやと。

列車が動きはじめた。あかりは窓をのぞきこむようにして、かあさんの顔をさがしたが、見つからない。あぶないよォ……と、清おじさんが、あかりをかかえあげて白線の内側までつれもどした。目の前の列車が白と青の太い線になり、見るみるうちにホームから消えていった。

そしてかあさんも、それきり消えてしまった……。

あかりは、目の前に立っているのが、とうさんとおじさんというよりも、見知らぬふたりの大人みたいな気がして、一歩さがって身がまえるようになかった。（自分でもどうしてそうしたのか分からなかった。）ふたりの大人は、こごえて早口に何かしゃべりあったが、あかりにはそれが、水槽の中の魚のおしゃべりに似て何もきこえず何も分からなかった。列車の走りさったあとにはレールが二本、にぶい白い線になってのびているばかり、プラットホームは三人だけのこして、からっぽになった。

それからおじさんの手がのびてきて、あかりのサングラスをはずした。夏の光がいきなり目の前で白い爆発をおこしたみたいに明るくて、あかりは目をしばたいた。小さな涙が一つ、ぼろんとこぼれたが、あかりはそれを明るさのせいにした。待っていたかあさんにあえなかったせいでもあるのは、自分でも知っているくせに、どうしてか分からぬまま、そう思いたくはなかった。

とうさんがあかりの手をとって歩きだした。いつに似ず、強いにぎり方だったのが、あかりの気になった。いつもは、あかりから、もっとしっかりとにぎって……とたのんでも、まあまあ……と、おもしろはんぶんみたいになよりないにぎりかたで、あかりをぶんぶんさせたものだったのに……。

構内の赤電話から、清おじさんは、奥さんに話した。奥さんは暑いので、あかりの家で待っていた。きょうはしばらくぶりに二組の夫婦とあかりの五人で、京の街へ夕食にでかける約束だった。それなのに、まずかあさんがおりてこないで消え、電話のあと、おじさんも、それじゃ、と手をふって消えてしまった。おばさんは？ときくと、とうさんはあいまに首を横にふった。どうやらこれも消えてしまっただけだった。愉しみにしていたことを、つぎつぎにはぐらかされた気もちで、あかりはぎげんななめになった。こうなったら、少しでも早く家に帰りたい。大きなニレの木蔭のゆりいすに寝かせてきたモンローに会いたくなった。モンローは洗い熊のぬいぐるみだから、まさか、いすをおりてうろつきまわったり、迷子になったりしないだろうが、夕立でもきたらずぶぬれになる。



あかりは近鉄線のホームへいそ
ごうとした。それなのに、とうさ
んは、あかりの手をぐいとひっぱ
って出口の階段へつれていこうと
するのだ。とうさんは、あかりの
顔をすまなそうにながめ、小さな
声でいった。

——家に帰っても、だあれもおら
へん。そやから、明日、八瀬のほ
うである講演の係りの人ンとこで
泊めてもらうことにしたンや。

そんなの聞いていない。何も聞
いていないことだらけだ——と、
あかりはますますふきげんな顔に
なった。

その係りの人は、改札口で待つ
ていてくれた。丸顔でやさしい目
をしていて、とうさんに負けない
くらいのつばだから、まるで、子
どものまま育った大人に見えた。

藤田です、と名のつたその人は、

とうさんにふかぶかとおじぎをしてから、おじょうちゃん、八瀬は空気も水もきれいやさかい、きょうは、川遊びにいきましょな……と、のんびりした調子で話しかけた。それが、こわばっていたあかりの気もちをとぎほぐし、あかりはまだ不満足のものの、心のどこかに、ピクニックにでかけるときのはずみが生まれていた。

藤田さんの運転する車は、冷房もよくきいていて、それがまた、プラットホームにいたときから熱くなっていたあかりの頭を冷やし、おちつかせた。

車は気もちのいい速さで、京の街をまっすぐに北へ走りつづけた。山が近づき、山道に入ると、目が緑で洗われるようで、思わず、目をばちばちさせた。プールで泳いだあと、きれいな水で目を洗うときの気もちよさがひろがって、あかりはいつのまにか眠っていた……。

2

目がさめたのはもう夕方近かった。あかりは広い涼しい部屋で寝かされていた。ほんの少しのあいだ、あかりは自分がどこにいるのか分らなかった。次の部屋からのとうさんの声と、それに受け答えしている相手ののんびりした調子が、あかりに、さっきまでのことを思いださせた。

(あれは、たしかに藤田さんとかいうてた人の声やわ……)

それからその藤田さんが、川遊びにいきましょね……と約束してくれたことを思いだした。あかりは、はね起きて次の部屋へ入っていった。

そやから、しばらくはひとりで……と言いかけていたとうさんが、ふりかえって、や、あかり、おはよう……と、とぼけた挨拶をしてくれた。藤田さんも、おはようさん……と言ってから、さ、はよ、川へいきましょ、魚が待ちくたびれてはる……と立ちあがった。

ふたりの大人にそろっておはようと言われたので、あかりはもう少しで、ほんとうに朝かしらん…….
と思ってしまうところだった。けれど、外へでたとたん、日の明るさが朝ののではないのに、気がつ

いた。午後のいちばん暑い時間を眠ったから、体がしゃんとしていた。あかりは藤田さんから手渡された魚すくいのおみの柄をしっかりとぎって小走りにあとを追った。とうさんも、いつのまにか田舎風な麦わら帽子をかぶって、ついてきた。

*

川魚は逃げ足が早くて、結局あかりは小さなのを一びきすくえたきりだったが、冷たくきれいな川に入って遊べただけで、満足していた。藤田さんも、そのところはちゃんと知っていて、すくった数にはふれなかった。そして、家にもどってから、生けすに入れてあるアユを、あかりにすくいとらせてくれた。あみから手づかみにアユをとりだしているうちに、よく知っているにおいが手についたのに気づいて、かいでみた。アユをつかんだはずなのに、手には魚のおいはなく、スイカのおいがした。首をかしげるあかりに、藤田さんは、

「ええにおいがしますやろ。スイカとおんなじや。なまぐそうないところが、アユやなあ……」。

と説明した。そして、水ごけしかたべないから、そうなのかもしれないし、そんなアユばかりたべると、おなかのなかまできれえになって、きれいな女はんになれるすやろなあ……と、笑いながら言った。きれいな女はん——ということばが、あかりの耳もとで小さなシャボン玉みたいにはじけ、夕食にでたアユを、あかりは一生懸命にたべた。とうさんに手伝ってもらわずに、こまめに身をとってたべた。にがいのをがまんして、おなかのところ（そこにこそ、「きれいな女はん」になれるもの）がある水ごけがつまっている……も、ていねいにたべた。――

*

……あかりは花嫁さんになって、とうさんに挨拶していた。重い日本髪に結った頭を、たたみにす

りつけるようにおじぎして、そんなときのおきまり文句、

—おとうさん、ながながとお世話になりました……。

を言っているのだった。

とうさんは仏壇を背にして（どうしてだか、これもたいていそんなことになっている）、紋つき姿でかしこまっていた。のっぽの体だけにきゅうくつらしく、二重に顔をこわばらせて、あかりの挨拶を受けていた。

結婚式なのに、お祝いに集まっているはずの親戚の人がだれもないで、とうさんと二人きりなのが妙にさびしかった。

—元気でがんばるんやで。

と、とうさんが言った。

—しっかりアユをたべるんやで、ほなら、きれいな女はんになれる……。

おとうさん、なに言うてはシの……— おかしくなって、あかりは目をあげた。とうさんはあいかわらずきまじめな顔でくり返した。

—しっかりアユをたべるんやで。ほなら、きれいな女はんになれる……。

あかりは思わず、ふきだし、

—おとうさんたら、てんごばっかり言うて……。

花嫁姿であることも忘れて体をまげて笑いこぼげた。そして、自分の笑い声の大きさにおどろいて——あかりは目をさました。

あみ戸ごしに夜明け前の空の明りがうつすらと見える。もう四時ごろだろうか。

（わたし、藤田さんところで泊めてもらってるんやったわ……）

あかりは暗がりの中で目をさまし、隣のふとんで大の字になっているとうさんに目をやった。とうさんは、いつか見た大文字山の送り火の「大」の字みたいに左足を長いめにのばして、寝ていた。黒姫からこっち、よく眠っていないのかもしれない——と思った。静かにしといて、ぐっすりやすませてあげねば……と、おかあさんみたいなことを考えた。

古い造りの田舎家の部屋が珍しく、あかりは少しずつはの明るさをましてゆく光の中の部屋のあちこちをながめていった。太いみごとな大黒柱、りっぱな床の間、夏の山を描いた水墨画の掛軸、遠い棚の上の姿のいい香爐……。欄間のすかしぼりは、しっぽの長い鳥（あかりはそれが鳳凰であること）を知らなかった）だった。

目を足許の壁までうつし、ついと見上げて、そこにかけられた面を見て、あかりは思わずするどい叫び声をあげていた。

とうさんがはね起きた。眠れずにいたから、反応はすばやい。

—あかり、どうした？

言うなり、あかりをかばうように、前に立ち、部屋中をすばやく見まわした。

—あ、あれ、何？ こわい。

指さすところに、面がふたりをにらんでいた。とうさんは、相手が面であるを知って安心し、電灯のスイッチをひねった。昔風の電球の光に照らされたのは——般若の面だった。

—般若か……。

まぐれにしても、いささか気味悪く、とうさんは、ぼそんとつぶやいた。

—はんにやって？

—ああ、鬼女のことや。

—こわい女……。

—ああ。もう見んと、もういっぺんお休み。

とうさんは面を裏むけたかったが、人の家のものでは、それもできず、壁の前からはなれて、自分も、もう一度横になった。しばらくして、眠ったとばかり思ったあかりが、

—うち、とうさんを起こしてしもた？

と、すまなそうな声できくの、ぎくりとした。

—いや、いっぺん目エさまして、うとうととっただけやったから……。

できるだけ優しく答え、答えながら自分のほうが、いたわられてる——と感じていた……。